島根大学教育学部後援会 編集・発行

国立大学法人島根大学

教育学部後援会誌

第2号
平成18年3月

ごあいさつ

教育学部後援会　会長　山　﨑　敦　史

学校を卒業して、仕事に就かないで自宅にいる若者、いわゆる「ニート」が社会問題になってきています。平成16年版の『労働経済の分析』（労働経済白書）によると、平成15年に52万人おり、前年よりも４万人も増えているそうです。学校に在籍しながら通学していない学生もいることから、実際にはもっと多いとの指摘もあります。少子化が進み、人口が減少し始めた日本社会にとって大きな問題です。

先日、この問題について研究している東京大学の玄田有史先生の話を聞きました。先生によると、「ニート」の若者たちは、怠けていたり甘えていたりしているのではなく、まじめに就職活動に取り組み、必要とされる勉強も一生懸命やってきた若者たちだそうです。まじめに一生懸命努力してきたにもかかわらず、目指してきた就職試験に失敗し、自信を失っているのだというのです。

これまで私は、「ニート」が増えてきているのは、長い不景気による就職難や、親の甘やかしによる若者自身の社会性の欠如が原因だと考えていました。しかし、玄田先生の話に、納得させられるとともに、私自身も反省しなくてはいけないと思いました。私たちがこれまで見落としてきたもの、親や先輩から受け継ぎ、子どもや後輩らに伝えていかなければならないものを見直させられました。

大学では、教室の前の方で熱心にノートを取り、成績も良く、夕方はセミナーなどに通い、就職専門誌などの雑誌等に書かれていることも含め、大人から言われたことをまじめにやってきた若者たち。ＩＴに関する知識や技能、外国で仕事もできる程度の英語力もしっかり身に付けてきた若者たち。これらの若者たちは、大人が大切であると伝えてきたことをまじめに一生懸命やってきたにもかかわらず、就職試験に合格しないのですから、社会が自分を必要としないと考えてしまい働く意欲を見失うのも当然かもしれません。部活動や麻雀に明け暮れ、就職試験に落ちたことに納得できた30年前とは状況が違うと玄田先生は指摘しています。

努力は報われる。しかし、自分の思い通りの時期や形で報われることは少ないこと。自分にあった仕事ではなくてもいきがい、やりがいのある仕事はたくさんあり、その中でも自分を生かすことができること。数字や形に表れ、すぐに答えの出るものも必要であるが、数字で表れにくく、すぐに答えのでないものの中にも大切なものがたくさんあることなどが、若者たちには伝えられていないのではないかと思います。

今、各界で力を発揮し全国的に有名な人であっても、順調にその道を歩んできた人は少ないと思います。遠回りや時には後ずさりをしながらでも、あきらめずその道を歩んでこられたという話をよく聞きます。たとえ試験で良い点が取れなくても、それが好きで努力を重ねていくことで身に付けることができたということも少なくありません。これらを、私たちは、人と交わり生活していく中で教えられ、身をもって体験してきました。ぜひ若者たちにも伝えていきたいものです。

島根大学教育学部の学生たちにも、１時間１時間の貴重な講義、1000時間体験、サークル活動、研究室活動などで、先生方や職員の方を始め、先輩や同僚などたくさんの皆様との出会いを通してこれらのことを学んで欲しいと願っています。学生たちへの指導や学生たち自身の学習がより充実したものになるように、島根大学教育学部後援会としても協力していきたいと考えております。たくさんの皆様に本会の趣旨をご理解頂き、ご協力頂きますようお願い致します。

後援会は、みなさんの会費で運営されています
お子様の大学生活を支援する後援会に是非御加入下さい

☆会費の納入は、入学手続きの際に配布した封筒に同封されている「銀行振り込み用紙」をご利用下さい。
☆会費納入口座は、「山陰合同銀行島大前支店（普）2702605　島根大学教育学部後援会」です。
☆お問い合わせは、後援会事務局（TEL.0852−32−6251　教育学部総務係）までお願いいたします。
（メールでのお問い合わせは、koho@edu.shimane-u.ac.jp まで）

教育学部ホームページのURLは　http://www.edu.shimane-u.ac.jp

教育学部の国際交流事業 —進む異文化理解と交流活動の活性化—

釜山教育大学校からの学生研修生受入れ事業

釜山教育大学校とは1990年３月に交流協定を締結以来、教育学部が中心となって、教員及び学生交流を行ってきました。教育学部「国際交流プロジェクト」で国際交流活動の見直し、交流協定大学の再構築を検討する中で、平成16年度より、「島根大学教育学部と釜山教育大学校との学生相互交流プログラム」を開始しました。

本プログラムでは、４日から１週間程度、学生を相互に隔年で派遣し、特別講義、学生交流、文化体験、附属学校見学などを行い、学生に異文化体験の機会を提供することを目的としています。また、教育学部では学部の「1000時間体験学修プログラム」の教育体験の一環として、本交流プログラムを位置づけています。

■2005年３月（６日間）　教育学部生12名が釜山教育大学校を訪問
【引率：教育学部　森本教授、藤井助教授】

■2005年12月（４日間）　釜山教育大学校学生15名が本学訪問

釜山教育大学校の学生が、日本文化に関する講義、島根県の伝統文化理解のための体験活動、附属小学校の視察と児童との人的交流を図るなどの研修プログラムに参加するため来学しました。

日本文化「茶道」を体験

附属小学校視察

また、同時に受入れ側の教育学部生も加わり、ともに研修や交流活動を行うほか、学生みずからホームステイのホストファミリーを兼ねて、日韓の学生が互いに協力して取り組む研修プログラムとしました。

浙江大学教育学院からの交流締結に関する代表団（教員）の招聘事業

島根大学教育学部の「国際交流担当プロジェクト」は国際交流活動の見直しと、交流大学の再構築を検討する中で、山陰・北東アジアという地域の歴史・地理・文化の特性を活かしたねらいで、松江市が友好協定先の中国杭州市に所在する「浙江大学教育学院」との交流の可能性を模索してきました。

教育学部では、2004年10月に当時広島大学に滞在中の浙江大学教育学院・田正平（Tian、Zhengping）氏を本学に招聘して以来、具体的な交流計画に係る意見交換を行ってきました。

■**2004年10月**：浙江大学教育学院学院長の田正平氏が来学され、教育学部において両機関の教育交流の可能性について協議を行いました。また、田正平氏は、本学の本田学長と松江市の松浦市長を表敬訪問されました。

■**2004年11月**：本学教育学部長、教育学部事務長、教育学部国際交流担当代表の３名が浙江大学教育学院を訪問し、今後の教育交流のあり方に関して協議し、具体的な交流提案と情報の収集を行いました。

■**2005年10月**：本学教育学部と浙江大学教育学院との間において、具体的な交流プログラムを開始すべく策定する実務協議のため、本学教育学部の招聘により、４名の浙大教育学院の代表団が教育学部を訪問し交流協定の協議を行い、本学の本田学長、山下教育学部長、松浦松江市長を表敬訪問されました。

後援会による教育学部支援事業

平成17年度に実施した主な事業はつぎのとおりです

① 学生の課外活動支援
部活動、大学祭等の資金援助のほか中四国大学学生交流経費の一部を補助しました。

② 教育実習支援
副免取得希望の学生の教育実習経費に補助をしました。

③ 国際交流支援
韓国、中国の交流大学への学生派遣、教員派遣に経費の一部を補助しました。

④ 広報事業
「機関誌」を発行し、教育学部の教育・研究活動や学生の皆さんの活躍をお知らせすることにしました。

⑤ 教育環境整備支援
学部の教育環境の改善を図る経費を補助しました。

⑥ 就職支援
就職情報の収集、就職先の開拓等学生の就職活動を支援する活動に補助しました。

特集 躍進する教育学部

山陰地域における教員養成基幹学部＝島根大学教育学部の誕生と発展は、日本の学校教育を変える原動力です

平成17年度「大学・大学院における教員養成推進プログラム」【教員養成GP】に選定

文部科学省の「大学・大学院における教員養成推進プログラム」【教員養成GP】の審査結果が８月29日に発表され、本学教育学部が申請した、「戦略的FDによる資質向上スパイラルの実現―地域教員養成基幹学部のミッションを達成する「協同」の構築―」が選定されました。

このプログラムは、文部科学省が今年度から公募を始めたもので、大学・大学院修士課程を中心とした義務教育段階の教員養成機関における、資質の高い教員を養成するための教育内容・方法の開発・充実等を行う特色ある優れた教育プロジェクトについて、国公私立大学を通じた競争的な環境の中で選定し、重点的な財政支援を行うものです。全国の国公私立大学から応募のあった101件（単独申請及び共同での申請）の内、34件が選定されました。

【教育プロジェクトの概要】

このプロジェクトは、「協同」を基軸とする教育学部独自のFD戦略の展開により、学生の教職能力開発を促す資質向上スパイラルを実現するものです。これは、県境を越えた教員養成学部の再編・統合を果たした教育学部が全体的な戦略に沿って、教員・学生・地域社会との協同を構築し、「1000時間体験学修」を中核とする独自カリキュラムの実効性を高めることで、学生の教師としての専門性・実践力を習熟させるものです。なお、取組期間は２年です。

教育プロジェクトの内容・特色は！！

Ⅰ　教員養成教育の改善を図る基幹施設「教育学部FD戦略センター」を設置する

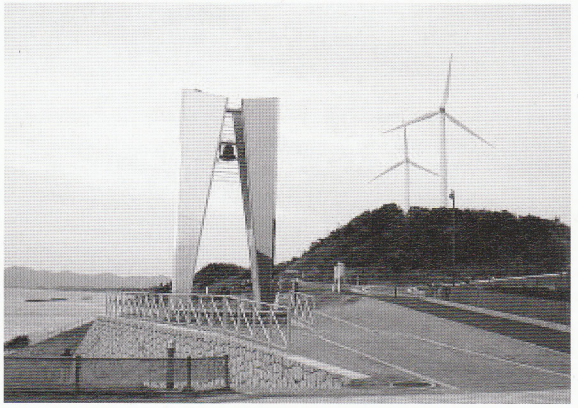
―「協同」を基軸とするFD戦略―

大学教育におけるFDは「教育活動の改善に係る研修・啓発」といった準備段階を終え、①具体的な改善を進める学部内体制の再構築、②FD的視点から教育課程や授業形態の抜本的改善を図る研究開発の推進、③その効果の客観的検証、といった実証段階に入っている。この認識のもとに、本プロジェクトでは「教育学部FD戦略センター」を設置する。学部における教員養成教育の目的を「より質の高い教育的実践力に学生を習熟させる」と捉えるとき、それは、学生が学問体系の学修と教育的体験とを往還する姿を、スパイラル的に上昇する立体構造として把握する必要がある。

この「資質向上スパイラル」を実現するためには、なによりもまず全ての学部教員が「教師教育者」という自覚を共有し、個々の専門領域はもちろん、その枠外にある「間（はざま）」を新たな教育領域として開拓すべく意識改革を行わなければならない。本学部ではとりわけ学部教員間の「協同」を鍵概念とするFD戦略を構築するために、その拠点となるFD戦略センターを設置する。

平成17年度㈶社会経済生産性本部 エネルギー環境教育情報センターが支援する「エネルギー教育調査普及事業地域拠点大学」に島根大学教育学部が採択される

山陰エネルギー環境教育研究会「山陰の地域に根差したエネルギー環境教育に関する実践的研究」～山陰地域のくらしとエネルギー～



道の駅「きらら多伎」から見た風力発電施設

山陰エネルギー環境教育研究会は、㈶社会経済生産性本部　エネルギー環境教育情報センターが支援するエネルギー教育調査普及事業地域拠点大学である島根大学教育学部の教員を中心に構成された「山陰地域の中核となってエネルギー環境教育に関する実践的な研究に取り組む研究・活動組織」です。山陰の学校・行政・企業・NPO法人等の方々にご協力を頂き、３ヵ年計画（平成17、18、19年度）で、以下の研究テーマ・目的・計画に従い、研究活動を行います。山陰エネルギー環境教育研究会にご参加頂ける学校・企業・行政機関等ならびに教育プログラム開発に協力頂ける教育関係者の方々を募集しています。

Ⅱ　教育プロジェクトの特色について

【取組の動機・背景】

本学部は、教員養成特化型学部という方針を選択するにあたって、自ら保有する教育組織と教育内容・方法のいずれをとっても、地域教員養成基幹学部として再生するには相当のパワーアップが必要であることを強く認識していた。「21世紀の学校教育を担い、教育改革に積極的に取り組む教員を育成する」というミッションは、学部の存在意義そのものである。したがって、改組計画では、「教育委員会との協定に基づく現職教員（実務家）の期限付き任用」、「教員（講座）組織の思い切った改造」、「1000時間体験学修の必修化」、「教科専門と教職の融合科目の設定」等、いずれも全国の教員養成系大学・学部に先鞭をつける内容が含まれており、取組むべき実践課題は明確である。

一方、組織改革や教育内容の改善は、これを担う組織と個人の力量に左右されることも自明である。本学部が、プロジェクトの内容として教員養成学部固有のFDに取り組む一連のプログラムを構想した大きな理由は、第一に、基幹学部としてのミッションを確実かつ永続的に実現するためには、学部組織の「成長」が不可欠であること。さらに、教員一人ひとりが「教師の教師」としての実践的課題を共有し、教員養成教育のプロとして絶えず自らの資質向上をめざそうとする存在でなければならないと考えるからである。

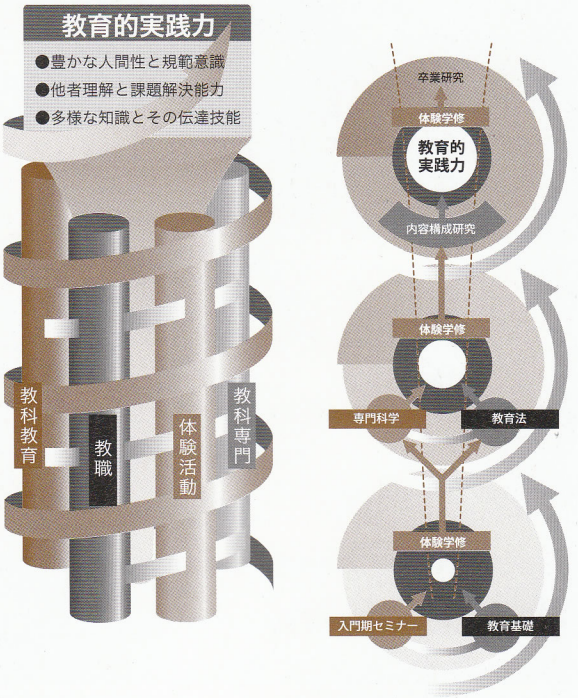
【FD概念の拡大と深化―教員養成学部固有のFD戦略の構築―】

本学部が構築した新たな教員養成プログラムを軌道に乗せ教育目標を達成するためには、学部教員の資質・力量の向上が不可欠である。ともすれば、「アカデミシャンズとエデュケーショニストの対立」の構図に陥りがちな教員組織を、新たな教員養成教育を担う「協同」組織に再生すること、教員一人ひとりが養成教育の主体として学部教育の全体を見通し、自らの専門性を生かしつつ実践活動に従事することが重要である。

この課題を実現するために、本プロジェクトでは「協同を基軸とする教員養成学部固有のFD」をプログラム化し、取り組むこととした。

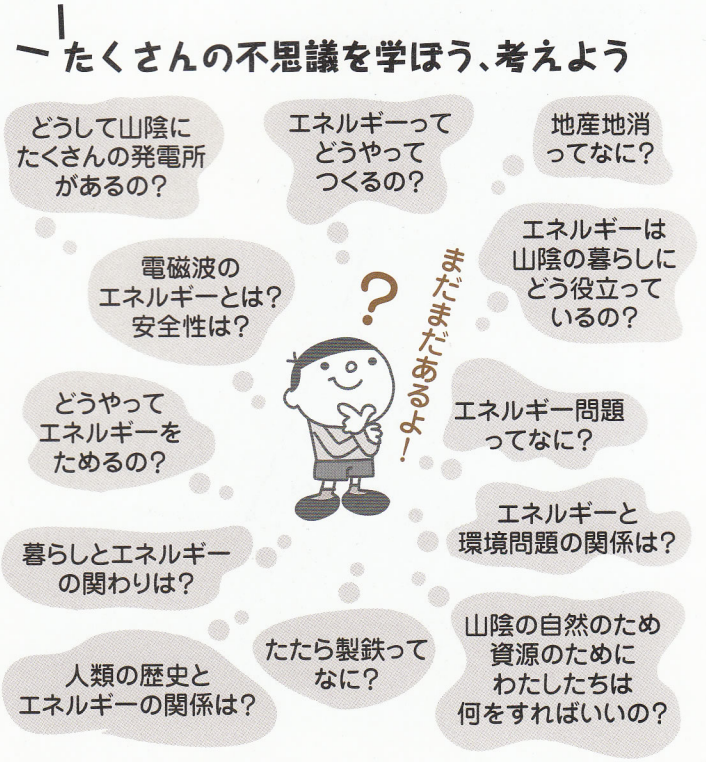
【FDがめざす「資質向上スパイラル」の実現】

「資質向上スパイラル」は、学問体系の学修と教育的体験の往還の継続と反復によって、徐々にその知的、実践的力量を向上させ、最終的に教職に相応しい資質・能力を形成することができる教職能力開発システムである。本学部のFDの取組は、「資質向上スパイラル」を全ての学生に提示すると同時に、その実現に必要な教育支援方策を絶えず検討・開発するために実施するものである。



研究の目的

松江市は、県庁所在地に原子力発電所が立地する日本で唯一の都市であり、しかも、宍道湖・中海に代表される「汽水域の自然」や昔ながらの「里山の自然」が数多く残る都市です。山陰に視界を広げれば、「たたら製鉄」や「石見銀山」など、過去において日本の工業の中心として栄えた文化遺産が数多く存在し、人と自然のゆるぎない共生の歴史がここ山陰に存在しています。これら山陰地方のローカルな事象を、現代のグローバルなエネルギー環境教育的視点から掘り下げ、特色のあるエネルギー環境教育プログラムを作ることが本研究の目的です。そのために、教育現場とのつながりの深い島根大学が中心となり、地域の小・中学校や高等学校、教育センター、社会教育機関などとのネットワークを構築し、教材開発、人材育成、教育実践活動を行います。更には、ホームページ上で研究成果を公開し、山陰地域をエネルギー環境教育の拠点として世界へアピールします。



平成17年度
学長表彰

湊　つばさ さん（教育学部生涯学習課程平成18年3月卒業）

第74回日本学生陸上競技対校選手権大会（東京国立競技場 7／1～7／3）
女子走り幅跳び3位　女子三段跳び3位

●日本一を目指して！

小学校５年生の頃に、父の勧めで市の陸上教室に入った事をきっかけに、陸上競技の楽しさを知り、中学校・高校・大学と陸上競技部に所属し、現在も続けている。走幅跳・三段跳を専門としている父の姿を見て、自然と私も跳躍種目に興味を持つようになり、父の指導のもと小学校６年生の頃から走幅跳を専門として行うようになった。

中学校・高校では、「日本一」という大きな目標を胸に、毎日厳しい練習に耐えてきた。その成果が実り、「日本一」にはとどかなかったが、中学校・高校ともに全国大会に出場し、３位に入賞することができた。そしてさらなる記録、期待を胸に、島根大学に進学した。

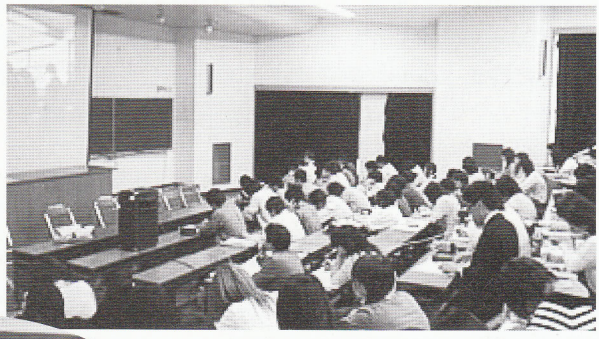
島根大学陸上競技部には、全国で活躍する先輩方も数多くおられたので、その中で一緒に練習するうれしさと、今までとは違う環境の中でうまくやっていけるだろうか、という不安で胸がいっぱいだった。しかしその不安が嘘だったかのように、アットホームな島大陸上部の雰囲気の中で、「ここだったら、自分の実力が発揮できるんじゃないか」と不安が期待に変わった。また、島根大学は設備が整っているので練習環境に問題はなく、毎日思いっきり練習することができた。そして記録も着々と伸び、大学１年の頃にインカレで入賞し、「日本一」という夢が現実味を帯び、今まで以上に気持ちを引き締め練習に取り組むようになった。

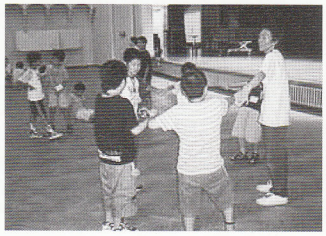
しかし、大学１年最後の大会で足首を骨折してしまい、大きな壁に直面することになった。記録も伸び始め、「これからさらに練習をがんばろう」と思った矢先の出来事だったため、ショックも大きく、やる気を失ってしまった。思うように歩くことも出来ず、脚が次第に細くなっていくのを見ると、気持ちは苛立ち、「もう前みたいに跳ぶのは無理なんじゃないか」と気持ちで負けそうになった。しかし、そんな時に陸上部の仲間や先生、大学の友達や家族の励ましがあり、「今、脚が動かせないなら他の部分を鍛えればいいんだ」と前向きに考えられるようになった。１年間というブランクはあったが、大学最後の年にインカレ３位で上位入賞することができた。このような結果が出せたのも、ともに練習をがんばってきた仲間や、友達の支えがあったからだと思う。このような素晴らしい仲間に出会えたことに感謝したい。

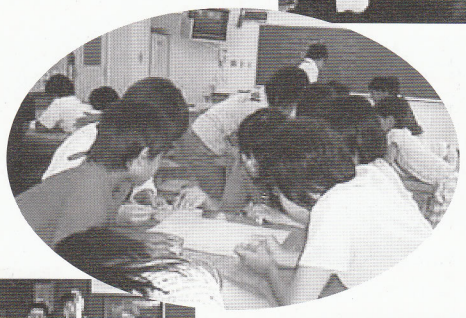
私は大学を卒業しても、陸上競技を続けていこうと思う。そして、今後も「日本一」という夢に向かってがんばっていこうと思う。

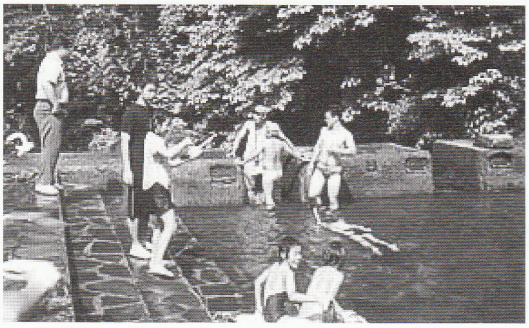
1000時間教育体験活動で活躍する学生諸君

平成16年度から開始された「1000時間体験学修」は2年目を迎えました。地域社会や教育施設で展開される「基礎体験領域」の活動にも、多くの学生諸君が大学を飛び出して参加しています。







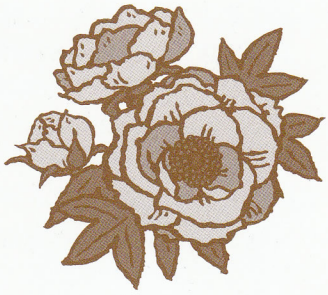


平成17年度 教育学部後援会幹事名簿（20名/順不同）

地区	氏名	課程・学年	学生氏名	備考
松江市	佐藤茂雄	学教4	佐藤彩	監事
〃	山﨑敦史	生涯4	山﨑順子	会長
東出雲町	石本治美	生涯4	石本和之	
境港市	湊英之	生涯4	湊つばさ	
松江市	西尾俊也	学教3	西尾菜穂子	監事
〃	小村健二	生涯3	小村志帆	
〃	石橋司朗	生涯3	石橋麻美	
〃	松本剛一	学教3	松本麻美	
安来市	宮本徹也	生涯3	宮本敬子	
仁多郡	塔村勇治	学教3	塔村美奈	副会長
米子市	吉田章一郎	生涯3	吉田理恵子	
松江市	黒田徹	学校教育2	黒田達也	会計幹事
雲南市	堀江安男	学校教育2	堀江智史	
松江市	飯塚節子	学校教育2	飯塚洋平	
〃	山根茂雄	学校教育2	山根舞	
米子市	内田義巳	学校教育1	内田ひとみ	
雲南市	西山成信	学校教育1	西山圭信	
簸川郡	曽田悟	学校教育1	曽田茉莉香	副会長
松江市	小村陽悦	学校教育1	小村さやか	
浜田市	驛田省吾	学校教育1	驛田久子	

課程名の正式名称は以下の通りです。

- 学教　学校教育教員養成課程
- 生涯　生涯学習課程
- 学校教育　学校教育課程



平成17年度 教育学部後援会予算の概要

科目	予算額（円）	摘要（主な使途）
Ⅰ 会務費	262,000	会議費
Ⅱ 学生指導関係費	494,000	
課外活動援助費	144,000	引率旅費、中国五大学競技大会補助
学生指導費	350,000	大学祭補助、学生寮援助費、学生交流補助
Ⅲ 進路指導費	200,000	
旅費	60,000	教員採用等に係る訪問旅費補助
就職対策費	140,000	教員採用試験対策・公務員・企業模擬試験等
Ⅳ 教育実習費	765,000	教育実習協力校経費
Ⅴ 学部充実援助費	749,000	
施設・環境整備費	400,000	花壇等の構内環境整備
渉外費他	349,000	各関係機関等との折衝・学部説明会　他
Ⅵ 国際交流関係費	600,000	釜山教育大学（韓国）、浙江大学（中国）との交流事業
Ⅶ 広報誌発行費	450,000	機関誌発行
Ⅷ 予備費	70,000	
合計	3,590,000	

編集後記

教育学部後援会から、「後援会誌第2号」をお送りします。平成17年度は、島根大学教育学部にとって歴史的な一年でした。国立大学の法人化から一年、地方国立大学の生き残りをかけた「戦い」は始まったばかり。しかし何から手を付けていくべきか、全国の大学が、そして島根大学の各学部は文字通り「模索」を開始しました。そんな中、教育学部は着実に自らの社会的使命を果たすべく、改革に着手しています。その成果は、いずれも全国に誇れるものばかり。本号に特集した「国際交流事業」、「教員養成GPの採択」、「エネルギー環境教育拠点大学の採択」はその一端です。島根大学教育学部は、いち早く教員養成特化型の学部つくりに取り組み、「1000時間体験学修」の導入や「教育支援センター」の創設などに取り組んでいます。

次号以降も、本機関誌上において学生諸君の大学生活、活躍の様子を豊富に掲載していきたいと考えております。どうか会員の皆様のご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。（事務局）

発　行：島根大学教育学部後援会
発行日：平成18年3月15日
発行所：島根大学教育学部内
教育学部後援会事務局
所在地：〒690-8504
松江市西川津町1060
TEL. 0852－32－6251
FAX. 0852－32－6259
印　刷：㈱谷口印刷

おまかせ下さい!!
企画・デザイン・撮影から、印刷に関わるetc.
また、ホームページ、CD-ROMのご相談もお気軽に。
株式会社谷口印刷
TANIGUCHI PRINTING CORPORATION
〒690-0133　島根県松江市東長江町902-59（朝日ヒルズ工業団地）
TEL（0852）36-5888㈹　FAX（0852）36-5889
E-mail:admin @ tprint. co. jp　http: // www. tprint. co. jp